

生物資源研究室 よく受ける質問

研究テーマ以外について、過年度をふくむこれまでの研究室訪問の際にいただいた質問について、以下にまとめました（回答はすべて、2021年5月時点のものです）。

このほかに質問がありましたら、いつでも ytkuyeno[at]shinshu-u.ac.jp（[at] -> @に代えてください）までお寄せください

コアタイムはありますか？ 週末や祝日に来る必要はありますか？

-- ゼミの時間帯（期ごとに決めています。月曜日か火曜日が多いです）以外は、特にコアタイムは決めていません。また、大学の休業日（年末年始などの休暇期間含む）は原則として休日ですが、動物の管理などで短時間来ていただく場合もあります。

夜遅くまで研究室にいることはできますか？

-- おすすめはしませんが、実験の都合などもあるので、制限はしません。管理監督面の理由から、あたりまえのように連日夜遅くまで在室することは避けていただきます。

長期休暇は取れますか？

-- 就職活動や私的な海外渡航などのはっきりした理由・都合がある場合、事前に言ってもらえれば、とくに妨げることはしません（必要な手続き・申請は、自身で行ってください）。長期不在の音信不通とならなければいいです。

アルバイトなどの制限はありますか？

-- 何をしてもいい、と思われられるのは困りますが、そうでなければ研究室として介入せず、各々の判断に委ねています。基本的考え方は他の研究室とそれほど変わらないとご理解ください。

学外（国内）で研究を行うことはありますか？

-- 複数件の共同研究を行っていることが多く、相手先に出向いて研究活動を行ってもらうこともあります。「日帰りを複数回」「インターンシップとして相手先に数か月間滞在」など、いろいろなパターンがあります。それとは別に、例は限られますが、動物研究の一環としてフィールド調査を行うこともあります。

海外で活動する機会はありますか？

-- 海外機関との共同研究や調査、海外実習への同行などがありますし、大学院学生に対しては、在籍期間中 1 回は海外での学会発表をしてもらえるように、機会を作ります。渡航費用等の負担は、できるだけ軽くできるように工面しています。国内機関との交流を含め、できるだけ学外に目を向けてもらうようにしたいと思います。

希望者が多く分属可能人数を超えた場合は、どのように選考しますか？

-- その年の状況に依りますが、学業成績や進路志望だけでなく、ひとりひとりの個性や指向を把握して判断できるように、インタビューや作文などをお願いすることになると思います。

求める人物像は？必要な資質はありますか？

-- 「時間、お金、友人を大切にしている人」を最低限の要件として毎年お話しています。そのほかにひとつ挙げるとすれば、「自分で考えて行動できる人」が希望です。実験ひとつにしても、最初にこちらで出した指示に対して、ただ言われた通りにするか、少し考えてから一歩を進めるか、その違いは大きいです。

「なんとなくこの研究室がいい」でも、志望理由となりますか？

-- 毎年当研究室に分属してくる学生も、必ずしもこの研究内容をもとに選択しているわけではないようで（堂々と、第2希望と言って入ってくる人もいました）、なにか運命を感じるようでしたら、その感性に従っていただくのも、ありだと思います。ただし、消去法の選択は止めた方がいいです。コース教員から見ると、それぞれの研究室がとても個性的魅力的なので、皆さんひとりひとりに最適の研究室は必ず見つかります。

分属の選考は、大学院進学希望者優先ですか？

-- 進学していただいて、できるだけ長く当研究室で活躍してもらいたい、というのはもちろんありますが、それが決定要因となることはありません。どのような進路であれ、場面場面で、皆さん自身で考えたとおりに進めるように、応援したいと考えています。

日常的に動物の世話をする必要がありますか？

-- 現在は山羊（シバヤギ）を飼養しており、その世話に力を貸してもらえるとありがたいです。

実験・研究のため、研究室で動物を養うことはできますか？

-- 大家畜（ウシ）を使ったものでは、これまではすべて国内外機関との共同研究として行ってきており、相手先で飼養している動物を使ってきました。2018 年からは研究室

の単独責任で、ニワトリ（肉用種）の飼養試験を行っています。もちろん、上述のシバヤギも「戦力」として頑張ってもらうために養っています。これらの動物は、基本的にその研究に携わる人が世話をしますが、負荷が集中しないように、差し支えない範囲で他の人にも管理をお願いすることがあります。

実は動物が苦手ですが、大丈夫ですか？

-- 私も学生のころはそうでした（なぜ今自分がこの仕事をしているのか、わからなくなる時もあります）。全く動物に触れずに卒業することも可能ですが、せっかくなので、動物と接することで初めてわかる・感じる何かを得る機会としてはいかがでしょうか。

ベンチワークが苦手ですが、大丈夫ですか？

--（動物と接することよりも）こちらのほうが得手不得手の差が大きいように感じており、適宜考慮します。苦手だがスキルを上げたい、という強い欲求を持っている人には、存分に失敗していただき、そのなかで腕を上げてもらえればと思います。

自分で考えているテーマについて研究できますか？

-- どの研究室でも同じと思いますが、前提として、皆さん自身の中で「なぜその研究に取り組みたいのか」「どのようにその研究を進めたいのか」の少なくとも一方が明確になっていて、それをほかの人にわかりやすく説明できるくらいでなければ、貴重な時間と資源を使って研究する必要性は大きくないと考えてください。そのうえで、自主性を発揮していただく点からも皆さんの希望を尊重したいと思っており、具体的に取り組みたいことを、聞かせてください。制約（予算や時間など）を考慮しつつ、豊かなアイデアを当研究室なりに具現化していく方法を、一緒に探っていければと思います。

在籍学生の主な就職先は？

-- 業種としては農業生産・食品・飼料業界の人が多い一方、サービス業、公務員（行政・専門 双方）の人も少なくありません。私は何も力になれないので、皆さん自力で、勝ち取ってきており、大したものだと毎年感心しています。

進学か就職か、進路を迷っています

-- あくまで大学教員の視点でコメントします。進学によって、研究（もっといえば自己の研鑽と陶冶）にかけられる時間が大きく違うのははっきりしていますが、大学院生という身分が持つメリットも、有形無形でいろいろあります。例えば、原則、大学院生のみ認められていることとして、「研究補助、教育補助の名目で大学からアルバイト料を支払える」「指導教員の同行を必要とせずに、研究調査活動や国内学会発表を行える

(引率せずに済むので、こちらも助かります)」があります。また、指導教員の承認や推薦が必要ですが、研究支援制度に応募して、自ら研究資金を獲得することも可能です。

このように、課程修了後のみならず在学期間中も、いろいろなベネフィットがあるということが示しているのは、それだけの資格と資質を有する存在として認められていることに他なりません。それは権利であると同時に責任も伴います。何をして過ごすかは進学と就職で大きく異なりますが、どのように過ごすかについても問われるという点では、両者に本質的な隔たりはないと思っています。若干厳しい言い方になりますが、もし学部4年生の時点で、大学院進学イコール学部生の時間的延長という意識が大きいようであれば、見方を変えていただく意味からも、就職をお勧めします。反対に、2年後の自身をイメージしながら、自らを鍛え高めることに集中して取り組む決意さえあれば、ゴールまで私も全力で支援していくことを約束します。